

共立女子大学文芸学部報

共立女子大学文芸学部報
第136号
発行日 2021年1月18日
編集・発行 共立女子大学
文芸学部
〒101-8437
東京都千代田区
一ツ橋2-2-1
発行責任者 深津謙一郎
創刊 1968年12月
題字 遠藤慎吾
第二代文芸学部長

学部報に関するご意見・ご感想を以下のメールアドレスまでお寄せください。
gakubuh@kyoritsu-wu.ac.jp
学部報は共立女子大学公式HPの「文芸学部」のコーナーでもお読みいただけます。
http://www.kyoritsu-wu.ac.jp/

第136号 主目次
第1面 トップエッセイ
美の旅
大学随想
特集 「大学という場所」
第2面 卒業生コラム
第3面 研究ノート
心象点描
第4面 各セクションから

〈今号の一言〉
「大学も然り。学問の宇宙を内包し、人と出来事に出会う混沌とした場所だからこそ吸引力がある」 (阿部)

大学随想

うねり波立つ海面から深
海に水が沈降し、再び浮上
するまで、二〇〇〇年近い
歳月を要するそう。海は
大きな循環の舞台であり、
所産である。人の世もまた
しかり。世の中のことを眺
めるにはその上辺の慌ただ
しさを見、その下に潜む中期的な移
ろいを忘れず、さらにその根柢に隠
れる極めて緩慢な動きを心にとめよ
という歴史学の先達の金言を想い出
す▼上辺から根柢まで、それぞれの
層で異なるリズムが流れ、層の間
に干渉が生じ、影響を及ぼし合っ
ている。各々の層の中には複雑な
旋律が多声的に響き合い、併せて
いるからややこしい。とはいえ、
リズムや旋律は次から次へと繰り
広げられ、間違っても巻き収めら
れて逆巻になることはない。波は
逆巻く。潮も満ち干。それがまた
らす鳴門の渦潮などはぐるぐる回
る。音の響きも限界だ▼空高く前
進していたと思ったら後退する天
体に惑った古人はこれをプラネー
スと呼んだ。徘徊漂泊の徒の謂で
ある。天動説の昔にはこの不可思
議な現象を説明するために「周転
円」なる惑星軌道を想定し、帳
尻を合わせた。この姑息な方便が
地動説をもたらす一因となるのだ
から、何が幸いするか判らない。
それぞれの惑星は各々傾いた軌道
面に太陽を焦点とする楕円を描
き、加減速しつつ様々な周期で
巡っている。そうした惑星の一
つ、地球で星を見上げていたのだ
から、賑やかな空にならない方が
おかしい▼それにしてもP D C A
サイクルの判り易いこと。世にも
てはやされる訳である。中期計画
各般でCをやれば、当然結果は
参差錯落、壮観である。それぞれ
の軌道で周期が異なるからか、潮
流の緩急を慮外に置いたのか。狂
瀾怒濤の世を漂流する大学には
深海の底流を想像する感性も、周
転円の計算で地動説に気がついた
コペルニクスの愚直も必要だ。
(上野慎也・教授・文芸教養)

コトバのモヤモヤ

藤田岳久

日々使うコトバ、何気なく使っているが、どうも細かいことが気になる質である。授業の配布資料を作ったり(今年度はリモート授業なので「配信資料」であるが)、卒論指導をしたりレポート採点をしたりする際に、ちょっとしたコトバの使い方が気になり、辞書を引く。つい先日、「この部分に用いる助詞は何がふさわしいか」でゼミ生と一時間ビデオ会議システムを介して議論した。疑問を解決できればスッキリするが、そうでないことも多く、するとモヤモヤが頭の中にあたまっていく。ちょうどこのモヤモヤを吐き出すことにする。そういうことはSNSでつぶやくのがナウでアーバンでフィステイティッドなやり方らしいが、私はSNSなるものを一切やらない。どうも自分のプライベートをさらけ出すというのがよく理解できない。しかもそれによって自慢をすることで他者を見下す「マウンティング」なる行為が見られるという。さらには、それを対象として研究をおこない論文を書いている研究者もいる。話がずれた。コトバについて執筆するなどという「それは言

語・文学領域の先生方の守備範囲では？」という声が聞こえてきそうだ。図書館のレファレンスサービスでは誤りなくコトバを伝える能力が必要だ、だから図書館情報学の教員がコトバについて語ることは守備範囲を外れていない(ということ)であろう。

ポリユミーな料理

モヤモヤコトバの筆頭は「ポリユミー」である。料理の量が多く食べごたえがあることを「ポリユミーな料理」と表現する。名詞に接尾辞「ポリ」を付けることで、たとえば「クリーミー」(creamy)、「クリームのようになめらかな」や「スポンジ」(spongy)、「スポンジのようにふにゃふにゃな」、カレース界でタイヤの状態を表現する際に使われる(というように)「ふにゃな」という意味のコトバとなる。

一方、ポリウム (volume) の意味は「量」「音量」である。「量」のような料理「って何よ? 意味不明である。調べてみると「量の多い」という意味の voluminous というコトバはあるが、料理の量の表現にはあまり使われな

そういえば、「ポエマー」というのも気になる。Poemに接尾辞erを付けて「詩人」と言いたいのだろうが、Poetというコトバがちゃんと存在する。

ボン酢は黄色い

ある男性が妻から「会社帰りにボン酢買ってきて」と頼まれ、「ボン酢」と記された黄色い液体の入った瓶を買って帰ったところ、「ボン酢と言ったら醤油の入っているものだ」と怒られたそうだ。「ボン酢買ってこいと言われてボン酢を買って帰ったらなぜ怒られるのか」と憤懣やるかたない気持ちでSNSで吐露し、多くの「いいね!」をもらっていた。という話を聞いた。まあ確かにボン酢醤油を「ボン酢」と略してしま

「ボン酢」と略してしまいう。湯豆腐をボン酢で食べる」といった具合に。

略すと言え、USBメモリをIをUSBと言う人もいる。それだとUSBメモリを挿し込む「穴」の規格のことになってしま

う。「文脈で判断せよ」と言われそうだが、USBはともかく、「ボン酢買ってきて」だけでは文脈もへちまもない。それとも「我が家の文脈」ということか。

たまたま菓子のレシピを見ていたら「アーモンドプードル」という材料があった。プードルといえば犬である。調べてみると、この場合のプードルはフランス語のPoudre(粉)のことだ。なぜ英語とフランス語の単語をくっつけるのだ。「アーモンドパウダー」か「アモンドプードル」(「プードル」か?)というように、どちらかに寄せてほしい。この手は他にも「バックシャン」「シュークリーム」などがある。

などと言っていると、では「スパー銭湯」も駄目なのか、と言われそう。片方が日本語のコトバなら違和感なし、というのは他の言語に対して不公平か。

防犯対策したらどうなる?

近年多発している自然災害を見るに、日頃より災害対策を講ずることが自身を守るために重要であることだと痛感する。

ところで「災害対策」とは「災害に対する策」、つまり災害に對抗しようということである。一方「防犯対策」というコトバもよく聞く。同じ理屈だと「防犯に對抗する」ということになる。それはドロボーさん側のやることではないか。我々がおこなうべきは「犯罪対策」ではないだろうか。モヤモヤ

「カセット」を名に冠した「カセットコンロ」というものがあるが、あれは「小箱」であろうか。筒状のガス缶はもちろん、本体も五徳などの出っ張りがある「小箱」とは言い難い。おそらく「簡単操作でガス缶を取り出せる」「カシヤットはめられる」という特徴がカセットテープと似ているからだとと思われるが、コトバが本来の意味で使われていないところになんともモヤモヤする。

待ち合わせの後?

スマホのLINEで連絡をとる。あやこれや書き連ねてきたりあう。待ち合わせというものは実にやりやすくなった。しかも地図アプリにより相手が現在いる場所までわかる。その昔、待ち人來たらず諦める、という場合は駅の掲示板に一言書いて去ったものだ(古すぎる?)。ところで、人間は待ち合わせた後は行動を共にする。というか、行動を共にするために待ち合わせをする、と言いたほうがいいか。ところが、急行

電車と各停電車の待ち合わせは、急行が追いついて駅で仲良く並んだ後、急行が先に行ってしまう。なんとつれない奴だ。違う、電車のモヤモヤではなくコトバのモヤモヤだ。

待ち合わせというコトバには「待つて合わせる」という意味はかなく、合わせた後のことには言及していない、ということか。であれば「待ち合わせデイナー」「待ち合わせデート」などと言え、モヤモヤは消えるだろうか。

あれやこれや書き連ねてきたが、そろそろ原稿の締切が近いので提出することしよう。そうしなると編集長に怒られる。と、ここでまたモヤモヤが。「長」は機関や組織、部署に付すものだ。学部長とか、隊長とか。「編集」とは行為である。あれ、でも「委員長」は? 「委員」は部署でも行為でもない。なぜ「委員長」ではないのか? 更にまたモヤモヤが…。(教授・文芸メディア)



でも、コンピュータのプログラム言語のカッチリさに比べれば、コトバのモヤモヤには実に「人間らしさ」があります。



Paul Klee, Portail du jardin M (Original color colotype 1932. Printed)

美の旅

奥 彩子

パウル・クレール・センター(スイス)で会い、ひとめぼれした小品の複製。じっと見つめていると、物語と音楽が聞こえてくる。クレールは北アフリカへの旅行で「色彩に捉えられた」という。光は世界を変える。私もいつか光を求める旅をしたい。(教授・文芸教養)

「カセット」の意味

カセット(cassette)とは「小箱」という意味である。かつて音を記録するメディアは「オープンリール」というむき出しの磁気テープだった。それをプラスチック製のケース(小箱)に収めたものを「カセットテープ」と称した(正確には「コンパクトカセット」。その

待ち合わせの後?

スマホのLINEで連絡をとる。あやこれや書き連ねてきたりあう。待ち合わせというものは実にやりやすくなった。しかも地図アプリにより相手が現在いる場所までわかる。その昔、待ち人來たらず諦める、という場合は駅の掲示板に一言書いて去ったものだ(古すぎる?)。ところで、人間は待ち合わせた後は行動を共にする。というか、行動を共にするために待ち合わせをする、と言いたほうがいいか。ところが、急行

電車と各停電車の待ち合わせは、急行が追いついて駅で仲良く並んだ後、急行が先に行ってしまう。なんとつれない奴だ。違う、電車のモヤモヤではなくコトバのモヤモヤだ。

待ち合わせというコトバには「待つて合わせる」という意味はかなく、合わせた後のことには言及していない、ということか。であれば「待ち合わせデイナー」「待ち合わせデート」などと言え、モヤモヤは消えるだろうか。

あれやこれや書き連ねてきたが、そろそろ原稿の締切が近いので提出することしよう。そうしなると編集長に怒られる。と、ここでまたモヤモヤが。「長」は機関や組織、部署に付すものだ。学部長とか、隊長とか。「編集」とは行為である。あれ、でも「委員長」は? 「委員」は部署でも行為でもない。なぜ「委員長」ではないのか? 更にまたモヤモヤが…。(教授・文芸メディア)

うねり波立つ海面から深
海に水が沈降し、再び浮上
するまで、二〇〇〇年近い
歳月を要するそう。海は
大きな循環の舞台であり、
所産である。人の世もまた
しかり。世の中のことを眺
めるにはその上辺の慌ただ
しさを見、その下に潜む中期的な移
ろいを忘れず、さらにその根柢に隠
れる極めて緩慢な動きを心にとめよ
という歴史学の先達の金言を想い出
す▼上辺から根柢まで、それぞれの
層で異なるリズムが流れ、層の間
に干渉が生じ、影響を及ぼし合っ
ている。各々の層の中には複雑な
旋律が多声的に響き合い、併せて
いるからややこしい。とはいえ、
リズムや旋律は次から次へと繰り
広げられ、間違っても巻き収めら
れて逆巻になることはない。波は
逆巻く。潮も満ち干。それがまた
らす鳴門の渦潮などはぐるぐる回
る。音の響きも限界だ▼空高く前
進していたと思ったら後退する天
体に惑った古人はこれをプラネー
スと呼んだ。徘徊漂泊の徒の謂で
ある。天動説の昔にはこの不可思
議な現象を説明するために「周転
円」なる惑星軌道を想定し、帳
尻を合わせた。この姑息な方便が
地動説をもたらす一因となるのだ
から、何が幸いするか判らない。
それぞれの惑星は各々傾いた軌道
面に太陽を焦点とする楕円を描
き、加減速しつつ様々な周期で
巡っている。そうした惑星の一
つ、地球で星を見上げていたのだ
から、賑やかな空にならない方が
おかしい▼それにしてもP D C A
サイクルの判り易いこと。世にも
てはやされる訳である。中期計画
各般でCをやれば、当然結果は
参差錯落、壮観である。それぞれ
の軌道で周期が異なるからか、潮
流の緩急を慮外に置いたのか。狂
瀾怒濤の世を漂流する大学には
深海の底流を想像する感性も、周
転円の計算で地動説に気がついた
コペルニクスの愚直も必要だ。
(上野慎也・教授・文芸教養)

真理と先生

遠藤 耕太郎

前期の半ばころだったか、小中高は対面授業が再開されたのに、なぜ大学だけ再開しないのかという学生の不満が盛り上がりつつきた。みなさんの中にもそう感じている人も少なくない。

文科省は「教室に多くの人が集まり、電車などの移動距離も長く、感染拡大リスクが高い」からと説明していた。いや、会社勤めしている人だってそうだろうと思ってしまう。案の定、文科大臣が「学生同士や教員とのつながりは教育でも重要」だから対面授業を増やせと、また朝令暮改をやりやがった。どうやら、彼らには大学が何をやる場所なのかという考えが抜けていない。

かつて「読み書きそろばん」と言っていたものを身に付けることが小学校である。「国語」とか「算数」。これらは生きていくための最低限のスキルだ。だから〇〇学とは言わない。中学もその延長上にある。スキルは、先生が教えて生徒は理解し覚えるという形で身に付けるしかない。そしてそういうスキルを身に付けたという証明書、「卒業証書」をもらって生徒は社会に出ていくのである。

でも、大学は違う。大学は学問するところだ。学問するとはどういうことか。この世界は不思議なことに満ちている。アメリカ合衆

特集

大学という場所

私たちの身体そのものは時間・空間に制約された存在です。その制約から自由になるために、さまざまなものが発明されてきました。インターネットは、その最たるものです。

これまでの大学は、限られた人だけが身を置くことのできる、特権的な場所でした。それがインターネットによって変わりつつあるようです。

そんな時、「大学という場所」は、とりわけ文学や芸術を学ぶ所として、どういう場所なのか、あるいはあるべきなのかについて、今号では考えてみたいと思います。

衆国の大統領とか直接は言わないけれど、他人を思いやらずに自分勝手なことをする人や国家がなぜこんなに多いのだろう。不思議だ。その不思議さを解き明かし、真理を探求しようとするのが学問である。だから〇〇学と言う。

自分勝手な国家の仕組みや経済はどうなっているのかと考えれば「社会学」や「経済学」、かつての日本帝国もそうじゃなかったかとすれば「歴史学」。なぜ思いやれないのかと考えれば「文学」だし、そもそも他人を思いやるとはどういうことかと考えれば「哲学」だ。

忘れちゃいけないのは、不思議を解明するのは学生(みなさん)自身ということだ。教員は真理の探究者の先輩でしかない。真理ではなくて、自らがこれまでの研究の蓄積の上に立って発見するものなのである。教員はその手助けをするだけだ。

四年をかけて、未熟かもしれないけれど、真理が見つかったところで学生は卒業論文を提出する。そして、この世界の真理を探求する力を備えた者であるという証明書、「学位」を取得し、社会をよりよく変革するリーダーとして社会に出ていくことになるのだ。

(教授・日本語日本文学)

学食と劇場の廊下

阿部 由香子

先日、会議を終えた後、さっさと帰ろうと神保町の駅へ歩き出したところで、八十歳前後の男性に「あのお」と声をかけられた。道でも尋ねられるのかと思ったら違った。学士会館の囲碁クラブの帰りだというその男性は、共立の校舎を見上げながら「この中に学食はありますか?」と尋ねてきたのだ。

なんでもその男性が小学校の頃好きだった同級生が共立女子大に進学をしたため、彼にとつて憧れの大学であつたらしい。一度だけその女の子に「学食に連れて行ってほしい」とお願いをしたものの、女子大だから難しいと断られてしまい、それから何十年たった今でも一度でもいいから共立の学食に入りたいのだという。新型コロナのこともあるからちょっと難しいかもと伝えたら残念そうに去っていった。

中に身を置いてしまおうと忘れてしまいがちだが、大学とはやはり

様々な可能性に満ちた憧れの場所なのだろうと思う。今回のコロナ禍によって、私たちはこれまで続けてきた、生きるスタイルを変えなくてはならない事態を体験した。大学ではオンライン授業(不完全是あるが)を実施し、演劇やコンサートのライブ配信サービスが急速に導入された。動画によって授業や舞台作品のコンテンツを送信し、受信するこのスタイルにもはや物珍しさを感じなくなつてきた。

やむを得ない手段として始まったこのスタイルを今後どのように残すのかに悩む一方で、これまで当然のように存在していた大学という場所、劇場という場所が果たしてきた役割についてもきちんと再考すべき機会となつた。

漠然と感じてはいたが、大学と劇場という場所の役割はいくつもある。まず教室であれ劇場であれ、そこに用意された自分の座席に身を置いて参加するというのが、大きな意味があるという点。そして授業や舞台作品といったコンテンツの受容以外に、その空間で体験する出会いのすべてを大学や劇場は孕んでいるという点だ。

明治四十年代、ほとんどが歌舞伎上演のための劇場ばかりだった東京に有楽座や帝国劇場という近代的な劇場ができた。当時の資料を見ると、椅子席やオーケストラピット、照明室の設置など機構としての新しさを兼ね備えていたことについてはもちろんだが、廊下や食堂で誰々と話したとか、あの人を見かけたとか、芝居の演目と全く関係のない劇場体験が数多く書き残されている。

大学も然り。学問の宇宙を内包し、人と出来事に出会う混沌とした場所だからこそ吸引力があるのではないかと思う。森の樹木を伐採するのは簡単だが、失ったものの大きさに気づいてから再び森林を形成することは容易ではない。大学も劇場も大きな岐路に立たされていると感じている。

(教授・劇芸術)

大学の「日常」

コロナ禍での「新しい日常」がうたわれていた頃、「大学生の日常も大事だ」というハッシュタグが話題になった。小中高の学校は再開されているのに、旅行や外食には行っていないのに、大学には行かないってどういうこと? といううたくさんの声。

たしかに、キャンパスでのんびりしたり街を散歩したり、その中でつくれるはずだった人間関係がごそつと制限されることになったのだから、そういう声が出るのも無理はない。

朝の散歩

八木佳代子

「朝の散歩」と一口に言っても、わたしにとっては感慨一入のものがある。

夫が現役のころ、川崎の学校まで朝早く出かけたので、送り出してしまおうと、子供たちが起きるまで一時間余りあるので、朝の散歩を始めた。

やがて子供たちが独立するとそれに合わせたように、親の問題が持ち上がった。父を送り、兄妹が亡くなっていったので、身内はわたし一人、母を引き取るようになった。

母は股関節の手術で感染症に罹り、長い入院生活のあと、車椅子の生活になってしまった。それから一五年、百歳七カ月で天寿を全うした。早いもので幽明境を異にして十年になるが、もう夢を見ることか」ときた。

母の意図するところは実に単純、他意はない。わたしを見かねて、何かしたい一心、ただそれだけなのだと思ふ。

「お前はデタラメな人間だ」と父が母によく怒っていたことを思い出す。母は目的に向かってガムシヤラに突き進む人だった。猪突猛進というところ。ちなみに母の



夫の定年退職後は、二人で上溝の横山公園にある施設で、夫はジム、わたしはプールに励んでいた。それが思いもよらずコロナ禍でお預けになり、今は近所を歩いていくと丁度一時間。朝の散歩は時間もコースも自然に決まってきた。見かける面々も決まってきた。同好の士の元気な姿に刺激され、老体に鞭打って歩いている。(1957年卒業)

吉澤 弥生

オンラインで代替しきれないものはたしかにある(ただ、オンラインで可能になったこともある)。オンラインでそのびのび学べるという人もいる。これも大事。また、オンライン授業ではたくさんの課題が出されて大変だった、夏休みはお盆返上で課題と格闘した、という話をたびたび耳にした。学生のみならず、今年度は相当がんばっていると思う。

ところで、教員の日常も新しくなった。筆者のケースでいうと、Konetに少し慣れた。Google Meetも使えるようになった。講義はPCに向かって語りかけたものを収録しアップしていると友人に話したら、「どんなテンションでやっているの」と真顔で心配された。でもなんとかがやいている。

一方、研究室から持ち帰った資料がそこそこ置かれ、自室の「仕事」のことを忘れて好きなものに囲まれるゾーンは消失した。うっかり夜遅くに仕事のメールを見てしまい、目が冴えて眠れなくなることもある。360度、24時間、仕事が生活を、人生を侵食してくる感じ。

これはまずいと思い自己マネジメントを心がけているが、なかなか難しい。もともと仕事と生活の切り分けの難しい仕事ではある。いや、たんに要領が悪いだけかもしれない。ちなみに筆者の研究テーマの一つは「アートと労働」で、労働時間の管理がない働き方における長時間労働や「やりがい搾取」を問題視している。

二〇二一年春、新型コロナウイルスの感染状況やワクチンはどうなっているだろうか。それに関する政府の情報開示は多岐にわたって十分になされているだろうか。大学の授業方法はどうなっているだろうか。筆者は自己マネジメントをできているだろうか。そういえばオリンピック・パラリンピックは…。

大学という場所の日常の見通しは立たないけれど、試行錯誤・七転八倒した今年の経験を糧に、心身をやらねないように、なんとか乗り切りたいですね。

(教授・文芸教養)

研究室から

日本語日本文学

今年度は怒涛の年でした。皆さんも慣れない遠隔授業に戸惑い、旅行やイベントにも行けず、大学生活があったという間に過ぎていったように感じたかもしれません。

さて、皆さんは「烏鬼忽忽」という言葉をご存じでしょうか。「月日が経つのは早い」という意味の言葉ですが、時間の流れはいつも同じはずなのに、大人になると早く感じますよね。調べてみると「新しい出来事をたくさん体験すること」が時間を長く感じるようになる秘訣の一つなのだとか。外出によって新鮮な体験を得ることも良いですが、大学生の皆さんにオススメしたいのが「学びで新たな知識を得る」ことです。知識を得ることは好奇心さえあればいつでもどこでもできる立派な体験です。「なぜ烏鬼忽忽は烏と鬼なのか」等の小さな疑問から結構です。無暗に外出ができない今こそ、好奇心を学びへ繋げて経験を豊かにするチャンスです！

限りある学生生活の中で、皆さんが日本語や日本文学に関する新たな知識を主体的に取り入れ、「4年間何もできなかった」ということがないよう、充実した大学生活を送ってください。

(助手・杉本)

英語英米文学

あっという間に年が明けてしまいました。様々な変化があった年でしたが、私は休日のお家時間が増えたので最近また読書を始めました。

英文専修の皆さんはReading Marathonに取り組んでいるかと思いますが、本を読むことはたくさんメリットがあります。語彙が増えたり、さまざまな話題に対応できるようになったり。大学最後の卒業論文にも役立つだけでなく、社会に出てもきつと役立つでしょう。

どうしても、就職すると読書に使える時間が減ってしまうと思うので、学生の今、また、お家で過ごす時間が増えた今だからこそ、たくさん本を読んでもらえたらと思います。皆さんのお勧めがあれば是非教えて下さいね。最後に、卒業する皆さんへ。卒業

フランス語フランス文学

オンライン授業に励む学生を見守りながら安堵と不安が交錯する毎日ですが、去る十一月に二〇一九年度卒業生のために卒業式典と懇親会が行われました。懇親会には卒業生のみならず、退職なさった先生や助手も集まり、楽しい会となりました。

二〇世紀フランス文学を代表する作家、マルセル・ブルーストの小説『失われた時を求めて』に着想を得て、仏文の卒業生へマドレーヌと紅茶を贈りました。紅茶やハーブティーに浸したマドレーヌの香りをきっかけに、過去の記憶が呼び起こされるという、いわゆるブルースト現象によって、皆さんに大学時代の思い出を呼び起こしてもらいたいという願いから

劇芸術

新型コロナウィルスの感染拡大が広がりが約一年が経ちます。観劇趣味の私は、今もネチネチとコロナ前の最後に観た公演に思いを馳せたり、収集した昨年度のチケットの枚数を数えては、あの頃どうなっていたかと思っています。観劇、難しいなあ。ありとあらゆる手段を用いて対策を行っても、やむを得ず中止となる公演。観客側も対策は必須ですし、人が多く集まる劇場へ赴くことへの抵抗感はまだ続きます。

ただ、コロナの流行により映像コンテンツが盛んとなったのは嬉しいことです。劇芸術コース

造形芸術

皆さんがこれを手取るのは一月末、授業終了後の発行となれば四月になっているかもしれません。

実は私、今年度で助手の任期五年を満了し、二〇二〇年度卒業生の皆さんと一緒に二度目の共立女子大学卒業です。こんな状況ですが、コース生の皆さんにきちんとお別れができる機会があるといいなと思っています。

さて最近のニュースでは、所在不明になっていた「承久記絵巻」

文芸教養

皆さん、はじめまして。今年度から助手に就任した笹原美咲と申します。二〇一九年度の卒業生です。文芸教養コース(のちの文化領域)にて歴史を中心に学び、刀剣と日本人の関係性についての

文芸メディア

こんにちは、メディア領域・文芸メディア専修助手の塩崎と申し

卒論を書きました。また、中学校・高等学校の国語の教員免許を取得しています。どうぞよろしくお願います。

私は二〇一七年の春、文芸メディアコースを卒業しました。三年ぶりの母校は、学内がリニューアルして、当時在生として通っていた大学とは少し違う場所に感じました。

さて、この学部報を読むときは一月頃でしょうか。一、二、三年生の皆さんは次年度に向けての準備、四年生の皆さんは卒業へラストパート、残り僅かの学生生活ですね。大学生活を長く感じた人もいれば、意外とすぐに卒業と思ってしまう方もいらっしゃいます。私、年を取るほど一年間が早く過ぎていくように思います。

大学という環境は本当に自由です。好きなことを見つけたら、趣味を極めることもできます。その一方で、自分と向き合う時間がたっぷりあるからこそ、自身で決断しなければならぬ場面も多くあります。思い悩んだときは周囲に聞いてみるのも大切なことです。気が向いたときに文芸メディア研究室(1418A)を覗いてみてください。

(助手・塩崎)

学部長から

共立女子大学の宣伝文句に、東京駅から徒歩圏内というのがあって、交通至便な反面、キャンパスが狭いという問題もあるが、考えようによっては、神保町の街全体がキャンパスなのだとはいえる。コロナ禍の現状で、目的もなく街をぶらつくのは何となく憚られるが、コロナ収束の暁には、共立の豊かなキャンパスを満喫して欲しい。

コロナ禍といえば、この出来事は、「場所」についての我々の見方も大きく変えた。たとえ、遠隔授業がそうである。大つ魔法が、その思いを後押しして学部の教室に來なくても、自宅に居ながら授業が受けられる。遠隔の

技術のおかげで、今年度前期の授業ができたわけだから、それは確かにありがたいのだけれども、いっぽうで、何か大切なものが失われてしまった気もする。

私は学生時代、教室にいるよりも、喫茶店で友人たちと議論を交わした時間のほうが長かった。神保町の「さぼる」にもよく通ったが、ここで文学談義をしていたと文学青年になった気がして、自信になった。

学生委員会から

「学生委員会」という名称の委員会ですが、「学生」による委員会はありませぬ。本学の学生が学生生活を送るための環境を整えるべく、学部を越えて「教職員」が問題を共有し、意見を交換し合い、時には新たな制度作成等を提案する委員会(委員長は副学長)です(委員は副学長)。

言うまでもなく、今年度も「さぼる」にもよく通ったが、ここで文学談義をしていたのはコロナ禍関連の事項でした。学生への緊急アンケートや緊急支援についての検討などもこの委員会で進められています。

第一回は五月末でしたが、文芸

学部から教員からも学生支援の提案がなされました。経済的支援(緊急奨学金、PCの貸出、何より文芸部の学びの「核」の一つでもある「図書館」本(あえて)で結ぶ)が利用できない中で学習環境をどのように整備するか、という点について、多くの意見が集まりました。

とはいえ、事態は日々変化します。学生の要望と支援のタイミングがずれては、援のタイミングがずれては、皆さんの日々の声も是非遠慮せずお聞かせください。

(教授・岡田)

専門科目委員会から

二〇二〇年は本当に皆さん大変だったと思います。これを書いて二〇二〇年十一月、まだ二〇二一年がどんな年になるのか全く見えませんが、大学が開いている限り、そこは皆さんの場です。今の時間を大事にしていきましょう。

さて二〇二一年度、新二年生の方から「ユニット」が本格始動します。「ユニット」はテーマ別にまとめられた授業群です。領域の授業に加え、他の様々な領域の授業を取ったり、あるいは領域の中の多彩な授業の中で専門性を深化させたりすることが出来ます。

(教授・村井)

編集後記

後期になって、演習などを中心に授業が始まり、ほぼ無事に終わろうとしている(たぶん)。一年生にとっては、半年遅れでやっと入学した気分になったことであろう。二年生以上は、まだ普通の生活に戻った感じかもしれない。

もともと、それで授業に意欲的に臨むようになったかと言え、また別問題である。きちんと発表の準備をこなさなかったり、授業中に熟睡していたり、困ったもんだと思いつつも、どこかホッとするとところもなく

卒業後に思い出すのは、きっと授業よりも、その内外での仲間とのエピソードのほうである。この学部報もまた、そういう仲間とのエピソードの一つになつてくれればとひそかに念じているのだが…。

(半沢)